

『歪んだヴォルケイノ』

右手には海 左手には神 挟まれて動けない火と泥土の志士

行動倫理は埋もれた苦惱 翼のもがれた天使の養分
とどのつまりは奇天烈な相撲 土俵際で白鯨を負んぶ

ここに来た探険家たちは口を揃える。どうせ飽くなき欲望の蟻塚に、与えてやる糖分もなかるうと。

果たして訪れた跳躍する馬車が、産み落とした琥珀色の死屍から、溢れ出てくる蜜は薔薇の香。

これは天女の報酬だと兄尾根が云い、否、聖母の餞別だと弟嶺が指を差し伸べる。

暈、空にかかり、陽は隠れ、暗い林道を行く旅人の舟。

ある者は腹を割かれ、またある者は肩を扶かれ、大半は呼吸を忘れ、血眼で会話をしている患者どもの隊。

樹々統べる奥地はとうに消え失せ、いまここに残りしは不毛の男どもの腹のうえ。

餌には事欠かないがどうせ残量の僅かな炎、ここで仕留めず誰が儲かる。

槌を巧みに操る劣等生。枯れ木を燃やす鬼子母神。焔の竜巻に乗り、旅人の胃袋を灼く策士の陣。

内は漆黒 外は紅蓮 二度焼きされた人々の仔

湯気は体液の亡霊か 腐臭は砕けた脳細胞か
とどのつまりは無碍なる銘菓 大味も饜えた酸味を謳歌

風は去り、人も去った。残ったのは悪しき夕暮れと幾許かの魂の抜け殻であり、それは土中の昆虫にでもくれ税を納めよと皆に云う。

呑気な子子である。乳呑み子の撞着であり、然るべき特権である。母は触角を預け、血を啜りに来、最早これまでと四肢を持て余し、祠に身を投げる。

なくとも善い夏は幸いで未だ活火山は寝惚けているから、胎児は母の死を見届けることもなからう。

母の骸を寝袋にして、蛹になる。なかは灼熱、溶岩の如し、蕩け微睡み天使は育つ。

天上は戦火 地下は荒河 作用とは浸蝕のことではなく蒸発の類である

夢もうつつも加熱した配慮 滑らされて炙られた骨の軋む音
とどのつまりは滅した廢炉 音の詰まりは音の響く門

大地を撫で、山肌を舐め、飛翔する灰燼、くたばり損ないの地獄の皇子。

ともすれば粘土質で産み固められた賢者たちは皇子と愛人である巫女のための指人形であることを欲し、くすんだ輝水晶のなかに閉じ込められた在りし日の松明は廢物の火。

適度にこの領域は湿度多く波風立たぬが誉れであるのなら、地を這う蛇の繁殖でさえお咎めなしと云うことだろうに。

野次馬の太陽が身を乗り出して、荒れ狂う熱に啞う獅子、熱力学的回転翼で逆巻く烈風、云うなれば千変万化、種子生した向日葵。

過ぎた日は地響き 明くる日は間欠泉 民よ 思い知る 때가来た

降り注ぐ痴話喧嘩の縄れに 巻き込まれて逝く無実な夫婦
とどのつまりは殿下を連れに舞い戻った悪鬼と小癩な風雨

赤鬼が覗き込んだ山頂傾き、大気を汚す子鬼どもの呼気。

はじめに轟きありき、怒号は兄弟間のいざこざに因むと枯渴した街の僧侶。

焼け残った札は一枚、中腹にある祠に備えよ、さすれば蚊が浮き足立ち、岩石の胃炎を慰めてくれようぞ。

知ったことか、と毒づく騎士。有り難や、と合掌する紳士。

井勘定で掬った溶岩を輝水晶のなかに入れ、持ち運ぶ夕べの侍は疎通区域の枠外に居り、誰もが泥を食っていた時代に嘲笑いながら熱気球を打ち落としていた嗣子の兄弟。

探検家が沈んでいくのを見届け、酒精を一杯。

子鬼どもが戻ってくるまで、受精を一回。

とどのつまりは白亜の時代に遡って思う、趨勢の輪。風情の場。

右手には海 左手には神 足止めされて敵わない 策士の甘壩

愛し愛されてしまった溶岩を 稚けな鞆丸に塗りたくって はい
とどのつまりは兄の背筋に 弟捕まり不時着して腐敗

葬送曲の準備間に合わず されど素敵な夢を視る 古の記

下山の一行を呑みこんで交わらず 大地創生の術を識る 引き濡の死

やがて似通ったその情熱も、心中冷めてしまつて凝り固まる、

旅人にとっては幸いの夏。兄弟にとっては災いの夏。

『ロマンセの名はギヤラクテイカ』

銀河には銀河の仕来り 何時ぞやの妖女 跨る箒星 巡る千年回廊

ブルージーンズに溶ける雲のうへの懺悔。時に呼吸もなく、無意識下の空想の閻値をすんで躲し、銅鑼を鳴らす真夜中の社交星団。女が手に取ったのは蒼穹のネクターで、男が取ったのは矮星色のスピリット。白か黒かも分らないじゃない、なんて嘲る女のグラスを奪い、流し込むと可視領域限度枠内の透明物質の渦。綺麗だけど好みじゃないわ、強いのは苦手なの、女の声をも吸い込んで銀河が廻る。時折、引き伸ばされる妖艶な笑みに、不意に迷入る小宇宙の耀き。

鎖されたタキシード素材の清潔感ある無重力室。引力作用のお試し期間を延長しますか。アナウンスが一定速度で近づいてくる。寝巻きは肌臆、寝言うわ言でさえ浮力をもち、漂っている白くて丸いものは、ヘルメットかと思えば今際の夢の疼きである。それは艶かしく、尾を引いて転がる様は、抜け出た魂のようでもあり、端整ながらも触れるには忌まわしい質感。寝返りを打てば腰の骨が軋み、きつと上気の所為で変な体勢で眠っていたのだろう。超見識知能が嗤う。

辿り着く先 銀河の彼方 夢の最中 出逢えぬ貴方

故郷であれば樹水の柵で、童話であれば水魔の牙だろう、そんな冷ややかな檻のなかに居る。船体は今にも凍え滅びてしまいそうな小惑星の縁に降り立ち、地盤にユンボを投入しようとしていた。吹き上がる霞は目晦まし、競り上がる岩盤は互い違いに連なる逆さの氷柱。切っ先に映る銀色の船体、鏡面部分に見てはならぬものを発見。解析終了。幻であり、女の顔。

単独飛行が常となる時代、活動の原動力となるのが超見識知能であり、その器となる小型舟艇である。傾斜角三十五、速度三百五十から五百が限度、リース契約は六十年、十年を経たところでいま海に出ている。仮初とは云えないものの、生命力とは異なる趣き、静けさに満ちた光と闇の只中の海、無水圧の海。故郷を久しいと感じたことはない、人恋しいとは、否。

辿り着く先 銀河の彼方 裸と身体は要不要 くだらかな斑 浄不浄

八十日かけ市場へ着く。十字の塔にドーナツ状のステーション。稲妻に似たサーチライトが第一形態から第五形態まで電波状態につれ変形を繰り返す人工衛星の翼を貫く、夕映えの都市、と云っても陽射しは関係なく内壁の街灯ランプが仄かな橙色を示す時間帯。人々は螺旋ベルトの中央に屯し、オープンブルーや地下カジノ、ムーヴイーシアターへと急ぐ、キミも。

カウンター席に腰掛け青い電飾の下でヴァイオ・レットに火を点ける。隣の席のカップルが嫌がって席を離れる。ここは禁煙席かい、訊ねるとパーテンが呆れながら首を振る。出された灰皿にはサジタリアスのシンボル。パーテンの背後には狙撃手という店名のエムブレム。氣に入ったよ、と呟く間もなくキミが現れる。たった十光年の遙かからやって来たみたいに。

起キテクダサイ。緊急事態発生。起キテクダサイ。煩いんだよ、超見識知能。

どこかで逢ったとキミが訊ねる。別の星で、或いは故郷で。キミは笑う。お生憎様、私の故郷は貴方とは違う星。訛りですぐ分かるもの。ヴァイオ・レットを揉み消して、キミに酒を勧める。メニューバーを引き出し、キミが好みのキーに触れる。選んじやった、貴方の奢りよ。後ろで若者のグループが呑み較べをしている。横目で見、キミを見、さも自慢げに肯く。

酔いが廻る頃には店内の喧騒は落ち着き、一端の大人のムード。土星の輪を忠実に縮尺した窓から、乱れ飛ぶロケットが見える。宙で爆

破し、瓦解した機体、今日は祝祭よね、とキミが云う。頬を綻ばせたのはキミが先で、萎れて息を吹き返した雪花のようで、堪らなくいとおいしい心地になったが、どこか騙されているような気がしてならなかった。歓声が上がった。

起キテクダサイ。主人、相棒、老イサラバエタ同志。余計なお世話だ、超見識知能。

祝杯の味は覚えていない。キミに勧めたあの透明な液体も、もしかしたら何かしらのエーテルで、もしかこの世のものではないのかも知らない。座った目にキミが映る。ふやけた室内、キミのルージュ、サファイアン・ルージュだけがそこかしこに浮ぶ。もう一杯とパーテンに差し伸べた手が、不意に重力を失って、だらりと宙を搔く、その数秒の、狂騒、瞬きの死。

星雲を巻き込み、推進熱を昇華させ、細い線状の渦を描く回転木馬。切れ切れになったルートのうえを暴走する星間ヨットの帆に受ける太陽風の暖かみ、感触は、キミと出逢った瞬間を封じ込めた霊媒。ポシエットに入れた緊急用発火ランタンを隣の匂いが、酒の香りキミの香りを薄らさせ、ひやりとした孤独の予感を強くさせる。起キテクダサイ、超見識知能の声。

静寂の鐘は生命のなかにあり 時を刻む音さえ その耳は聞き取れない 夢の展望台は臉の裏にあり 見渡す聡明な海原でさえ 遠くに感じる無為に感じる

また独り、旅に出る。あの、リゾートに電子光学を帯びさせた都市がなんだったのか、壮大なパレードがなんだったのか今は解せない。それらよりもバーで出逢った女が誰だったのか、それよりも、どうしてあの女が頭から離れないか、どうしても解せない。私はあの女の何処に惹かれたのだろう。超見識知能が、キミ、と呼ぶ、あの女の何処を、私は愛して。

記録される言語、描出される文章、すべてを拾い上げていっても、巻き取られていくブレンディスクの先にある記憶へは辿り着けない。相棒が孤独へと寄り添い、また独り、セルフテリングをしている傍らで私は何を思うのだろうか。独白が物語とイコールで繋がれ、孤独に定着したとき辿り着く先は暗黒の無我。見届けてから、私も帰化シテイクノダロウカ……。

相互の哀しきは頭蓋のなかにあり 相互の慈しみは心の臓のなかにある 齟齬は互いの広大な精神の器量にあり 重ねて互いの壮大な恋慕にある 狂騒にある

満ちていく宙、涸れていく空、舟艇の軌道に合わせてなだれ込んでくる弾道、満干の差を狂わせたのは流星雨であり、郷愁の怖れである。一枚の絵画に傷が刻み込まれる瞬間とも云い、清澄な小川に注ぎ込まれた重油の帯であるとも云う。片割れば混濁を愛し、又ひとつの片割れば無秩序を受け容れられず地に墮ちる氷柱の切っ先となり、汐で濯がれ、いま、溶けた。

秩序成す空間で水と埃とが交わりあつて、昨夜の夢のつづきを視始める。耳栓を外しベッドから駆け落ちルト、窓の外へ吹きさらし夕映えの表土、ハッチを開ケテ踏ミ出す一步、遙か地平の境界ノ際に佇む面影、目が霞ムノは寝惚け眼のセイダろうか。蒸発スル舟艇、風化スル足跡、行く先ハ知ッテイ。独白が秘匿シテイタコスモナウトの夢デアリ、回路ノ恋。

銀河には銀河の仕来り 何時ぞやの妖女 髪靡かせる火星の風 精巧な意識もやがて忘却の彼方 見送る箒星 辿り着いた千年回廊

『展開式螺鈿』

切り開かれた腹腔で蝸局巻くキララ 蔦伸ばした先で花粉散らすキララ

無駄な禊と咯血を吐いた夕暮れ。枝垂れた柳の下にミクロコスモスと摩天楼。遠い山から漏れる曙光、一番星が出、群青と薄橙とが滲む黄昏。

少年が蹴躓いた石が飛び退き、砂地で打ち付け合い連なる、まほろばの撞球。快い飛礫の爆破、石の肌の音はさかしまの空で星を生む、誕生。

隣人は木立に踏み入っていく少年の背中を目撃していた。初夏と晩夏が布切れだとして、両端を重ね合わせたら、それつきり少年は戻らない。

川に涼みに行った少女も又居り、さう小魚、泡ぶく田螺、居睡る蛸蛄、群れの蝌蚪、水面から戯れ事、夕風に誰かの泣きじゃくる声がある。

青よ 不安定で窮屈な都市の鈍色に 彩をつけよ 青よ 累々と封じられた霧根の夜風

腹下しのいたづきには苦艾を臍に巻き、毒消しの効用を明日の蛍光灯の紐に結わせ、重圧で切れたのならそれも又好し。蓋を開き回路の臓物に手を加えるならダイオードを装着、換子要らず、超伝導コイルを這う蚯蚓、吐いた土塊に宿る微細な弔電機関を、寺社から飛んでくる鴉に託す。

泣いていたのはキミ、啼いていたのは虚空に飛ぶ鴉。失くした紐はその嘴に引っかかっており、安堵も束の間、指を噛まれる。骨まで啄ばめられて腹が鳴った。そう云えば昼から何も食べていない。盆に乗るチョココロネ、カカオにカスタードクリームを混ぜた想い出の味、忘却の賞味。

青よ 不時着する悠久の都市の蝨色に 色斑をつけよ 青よ 深々と降る朽ちた細胞と眼球の蚊

友と連れだつて草原を歩く。昔、連れ去られた尚、別の友を探しに行く。薄野原から脈打つ竹林の怪物、不法投棄された水槽から生じた魂魄の鍵守りであるか。泥に塗れた老眼鏡、砂利に埋もれた傷痕の杖、晩夏に漂着した少年の悲運を嘲笑うかのように、震える声を出す落ち葉の亡霊。

懇ろに、小枝と物差しと色鉛筆とで形成すカタパルト。向かうは西だとドリルを地に差す。書き残した霧根を読み解いたのは千年も後に訪れた飢餓なる賢者であれ、露ほども知らぬ故に只沈黙と、方程式は不可解不愉快。黄色い帽子、小川の辺に取り残されて、以来、忘れ物は御景頂に。

耽溺の川に 瞑想の森 廃校を去り 程度の異なる電光石火 攪拌される筆の運びが墨を散らして幻想雪花 酔いどれて赤化

再会の頃は、豊かな憧れ。星々は宙返り蟻虫紛いの躍りを魅せて、夜露となりて流れる天上の窓。空の割れ目から差し伸べられた逞しい片腕。

迂回の頃は、神妙な面持ち。交通安全、黄色い帽子。枯死た向日葵に丁重な挨拶を、種子の並びを指でなぞつて迷路遊びで薄明を待つ、初夏。

陥落の頃は、急傾斜の罫。悪戯に掘った蟻地獄の恨みを孕み毒虫に刺される夢、羽化する夢、猿に捕まり食される、初めて呑む珈琲の御供に。

輪廻の頃は、其々の黎明。化け坊主と罵られ項を刈られて待ち惚け、往く坂道は山羊が居たオレンヂ、いまは藍色、闇の果て、一番星を見る。

爽快な夜に 快活な宵 いますべてここを飛び立ち われても末に電光石火 逢う事も隠れる事もなくて憩う 鉛細工の世が雪月花となる

今生に二度も来ぬ夏、洒脱な帯、茶を呑み縁側で花火を嗜む、迷い家の居るこの浜辺、墓地の傍ら、少年の睡る樹海の秘密基地。戒名はなし。

咲き乱れる煙火の数だけ血に濡れた栈敷があり誰かの腕の温もりもあった。降り注ぐスコール、幽玄に罅を探した故郷の名はホットスボット。

密生する蟋蟀、鬱蒼とした酸漿、火柱で囲まれた竹藪で皚皚とした青写真の背景に、忍ばせる小函のなかで回天する電磁石、示す名は花言葉。

爛漫に触れた道端の辻斬り、塵芥の棲まう草叢で姦しい寝姿の少女を見つけた夜から、蟀谷を疼かせる電光石火。最愛の、少女の名はキララ。

無惨にも開腹された晩夏のキララ 敬虔にも血しぶく小路を往くキララ

鬱血した蝸局は青 過日で咲う蜜蓄えの青 さぎ取った果実はぼくらの子 屹度、瑞々しい螺鈿の仔

『手広い遊歩業者』

眠りを妨げる悪しき軍人よ 彼奴の足の臭いを探れ
萎れたついでいい 砂浜に築く砦に飛び乗り 夏の記憶を 午後の媚薬を

臍の緒に閉じ込められた少女が謳う、生と呪いとパステルカラー。

確かにあの夜あの草叢に、二人いた、笑っていた。

脳に溝に注ぎ込まれた熟女が謳う、老いと好奇とセピアの遺影。
幽かにあの夜あの押入れに、二人いた、眠っていた。

石になろうか どうせ鳥に啄ばめられるのなら 汁があふれ出す果実よりも石がいい
石の悲鳴が聴きたい

復活を妨げる瘴気の運転手 彼奴の耳の垢をこそぎ取れ
腐らせたついでいい 永く続く体毛の丘 姫は狗となる 旅の記憶を 病の思想を

吃音障害、纏足姿の少女へ。枯れ木に賑わいさながらの豪勢なギフト。
軽やかに紐を解き、あちらの男の居場所を教えよう。

常時不整脈、着流し姿の熟女へ。乱れ撃ち、集中砲火でパパラッチ。
円やかに演じてみせよう。舞台裏からこんにちわ、ママ。

癖になろうか どうせ嘘に塗れた恋だわ 遺書を認めたつて筆跡に貴方の
前世の貴方の癖を見るの

融解を妨げる天寿の易者よ 彼奴の背筋の反りを見破れ
間違えたついでいい 情け容赦ない星回り 譲れない美学さ 愛の記憶を 玻璃の受難を

どうもよい天気です 運行は快調 右手に見ゆるは啓蟄のサバンナ 左手に見ゆるは青春のコキユートス
切符を拝見いたします されど不可視の切符です デイナーは明後日の方角ですが コインひとつで召し上がれます
札束に恵まれた人ですか 泥水に吞まれた人ですか 目を疑います 貴方の微笑み ……ミセス・バリケード、客人が帰られる

氷の宮に串刺しとなった行灯の姫君。神酒を取れ、御祓い、禊、すべてにフアック。
詳らかに解体作業 実しやかに流れる黒人音楽の新たなる風。

蓬の褥に押し延べられた電線の侍女。采配を振れ、発明隊長。剣先のスパイク。
朗らかに啓蒙活動、大人しやかに暴れる死の舞踏、教会へ行く。

橋になろうか どうせ部屋を抜け出せないなら 穴ばかりの大理石でいい
朝と夜を結ぶ橋になりたい

疎開を妨げる饒舌な蟲族よ 彼奴の毛穴のかすを穿れ
問われたついでいい 蟲の実存を問う者に己の価値は答えられず 兵の記憶を 飢餓の画像を

さて こちらで一休み 夕風の余韻は切れた蜥蜴の尻尾です
どうしたものか 蒸し暑い昼下がりに 茹だつてしまったね 五歳児の怖気も

相も変わらず天を摩しております頭脳明晰なおブジェクト
名付けて急転直下のオベリスク これは落第点

螺子のイカれたダムボーイが頂きでピースサイン これは及第点
致し方ないので従兄弟の折禱師に頼んで首を刈らせていただきました
こういうこともするのです 名付けて暇潰しの万能力学

あれもやろう、これもやろう、羨ましいですかこの大忙し
授けましょう気楽な望遠鏡 探し当てましょう桃源郷

手懐けましょう音速の飛び蜥蜴 確かめましょう探し人の姫君
……ミセス・バリケード、客人のお帰りだ。

『双葉』

ハミングバードに喰われた双葉 遣る瀬無く 友が泣く
長靴の下 踏まれた双葉 寄る辺無く 蝶が啼く
因果応報 道化の祝詞 混凝土に受精して水澄しに吸われた詠

第一の国は明るい。蛩を睨んだ眼球のよう。黒く縁取られた柵塀は瞳孔のきわ、砂嵐は目脂の乱舞、空色の緞帳は落涙に似て。贈り物は羽の生えた靴だよ。早を飛ばよ。瓦斯に包まれ、落ちるよ。絨毯は凹むよ。砂糖漬けの麺麴、穿るよ。きみの兄弟。繋がれていない、別の兄弟。

第一の国は紺碧の巨石の倅。国王は朝、止まり木でシャボンを吹き、午後は人差し指で結晶を織る、長閑な平和な霜焼けの国。回覧板は火の滾る盾だよ。野次を防ぐよ。善良な隣人の在りもしない仮面を焼いて。口々に云う殿下の誉れ。電荷の憂い。伝家の宝刀、天下のロートル。

囁くな 蛆虫の這えた声で 頭蓋のなかに潜んでいられるのはお前の特権じゃない
いいかよく聴け 我が愛しの疱疹
いいかよく聴け 哀れみの供養層

第二の国は騒がしい。音響博士の盲腸のよう。別紙に添えば贖罪のマンガラ。思考絡みの人体実験、保険のほの字も聞こえない。カルテは奥歯で噛んだホイル紙。ナースを罵るよ。白衣は裂かれ、解れるよ。絵師が笑うよ。ホルマリン漬けの試験管、拗らすよ。きみの兄弟。解体された、別の兄弟。

第二の国は桜桃の花散る広場。国王は週末、馬車で土を蹴り、夕風に映す歴史書の雄姿、民よいま一度仰ぎ給えよ、歌が響く。行進曲は血に飢えた腹の音。兵を成すよ。園児が遊戯に使っていた兜を再び手にして。呆観とする珍奇な光景。沈黙な亡命。見逃してヨードチンキを塗りたくり自慢する。

ふんぞり返るな 下手糞な体技で 骨盤を共有していられるのはお前の特権じゃない
一寸も動くな 我が狂気の包装
一寸も動くな 逆恨みの不養生

第三の国はない。母が食った。

第四の国もない。父が娶った。

第五の国は荒れ果てて、息子の杯で塵と化した。吐いて、棄てた。

味は悪くとも、飾りになる。万象への優しさを持つ胎児がいたなら、伝令を放っていた頃合だろうが、彼もまた亡き、

わたしの背骨の肢のひとつになり、手を振る、わたしを通し、わたしの肩と肘を通して、ここにいるのだと躍起になる、巨人の描いた世界地図には彼の名残もなく、老いさらばえた司書が守る、古代の日記においてのみその姿は確認されよう。

第一巻はわたしと彼の誕生を綴り、

第二巻は青春をなぞる。

第三巻で結婚を知り、

第四巻で自生の悦と辞世の悲を告げよう。

第五巻はない。息子が食った。

嘆かわしや、彼の遺恨のおかげだろうか、息子もまた小奇麗な双葉。

その片割れが夜な夜な轉る。

喉の震えは竜巻に似て、声色は嘗ての兄弟に似て。

轉る歌を、斉唱させたら、民が半分に減りました。

ハミングバードに喰われた双葉 遣る瀬無く 友が泣く
長靴の下 踏まれた双葉 寄る辺無く 蝶が啼く
六道輪廻 祭神のキス 五月蠅い遺伝子は刃金に衝突
森羅万象 才人を斬る 宿りを離れ わたしは元気です

『不謹慎な生 Horn〜バズーカなんてへっっちゃら〜』

ライブラよ ライブラ こまっしやくれた冒険者の儀式
切手、パスポート、親父の遺産、よいか重たい牛の羽

断崖絶壁。特に酒精おぼえたての体には眩暈もひときわ。
魂消たのは高さや厳しさなどではなくて、単なるザイルの締め付け具合。
どこかで感じたように窮屈。どこかで感じたような信頼。

激震街道。緩やかなカーブだつてさ。霊が出るのに。
跳ね除けたのは自転車走者。御年、喜寿の韋駄天老子。
どこかで会ったように旧来。どこかで会ったような親切。

ライブラよ、ライブラよ、秤に見立てた諸腕は今では休息鳥の止まり木。
案山子に似たような同級生の子、右は墓石、左は銅像。

例え話はこりこりさ 捕まえられて剥製さ 鉛の玉に封じ込まれちゃ一巻の終わり 溶解炉さ

シーソーよ シーソー こまっしやくれた道化師の楽屋
種も明かしも、教則本もないのに覚えた魔法数

天涯孤独。疼く顎、痛む頬、十年遅れの親不知。
願いましては投与と交渉の手はず、先生、今日も根暗勘定。
どこかで案じたように飄々。どこかで案じたような秀才。

股脈胎動。躍るリズム、一置いて二を繰り返して、凜。
叶いましては最後の切り札。賢者の域に達して死に化粧。
どこかで気張ったように巧妙。どこかで気張ったような醜態。

シーソーよ、シーソーよ、梃子に見立てた背筋力も今では後背位からの失敗り。
膺肭臍から寝技を伝授、通信簿の値は五、素行悪くて二。

例え話はこりこりさ ぶん殴られて浄瑠璃さ 火薬と一緒に掻き混ぜられちゃ一端の兵器 浄玻璃と化す

土産話はこりこりさ 取り囲まれて贗薔薇さ スイッチひとつで爆心地ならば叱咤激励も要らぬが応報
物語もこりこりさ 取り憑かれて尚 指人形さ 五本まとめてぶったぎってしまえばバズーカなんてへっっちゃらさ

バズーカなんてへっっちゃらさ バズーカなんてへっっちゃらさ バズーカなんてへっっちゃらさ
吹き飛ばされて襲名の丘で不安定 地雷原の真っ只中で懺悔

草臥れたのは過去の人 粉塵と化したのが其処の人
バズーカなんてへっっちゃらさ バズーカなんてへっっちゃらさ バズーカなんてへっっちゃらさ
選り取りみどりの淫らな臀部 綺麗に剥かれて缶詰ケース
開ける頃には過去の人 開けて爆発 其処の人

だからバズーカなんてへっっちゃらさ 血潮のニトロが焼き尽くすのはバズーカができる三世紀前
忘れた頃にやってくるのが愛しき嗜虐！ 愛しき自爆！ HA〜HAHA〜

『喪われた都市』

幼いころは黄昏も何も、見知らぬ都会の風景でした
鳥は霧散し、雲、廻り伸び、さらなる最果てをを目指すのでした
漕ぎ疲れて立ち止まったわたしは、振り返りこそしませんでした
明けては午后の八つ時でした　すべてが滅び逝きました

迫られて茨を呑み、喉を灼かれたわたしでしたが、次の町はすぐ近くにあり、見覚えのある類が溢れた、けれども大半がどうでもいい、そんな、親しみのある町でした
撓んだ市庁舎、二本の塔を、繋いだ空中回廊はカーヴを描き、職員が駆けずり回つてゐるので
書類を担いで　縦列をなして　列なる様は山登りのやうでした

小さいころは子守唄も何も、言語からはやや遠き、耳あたりのよい母の鼓音で、
叱咤激励の端緒も何も、分ならず、ただ微笑んでゐたのです

親の知らない子よりは幸福で、権力者の孫よりは非力なだけで、タヴーにもならぬ平凡な家庭の生まれ、それはそれで不自由な旅だつたのでせう
気がついたのはやはり八つ時　地面が足裏を掴んで放さなかつたあの日

十字架を背負い、看板を背負い、顔しか知らぬ頭首の塑像も背負いました
重みとか有難みとか、あるわけないでしょう、なぜならわたし、まだ子どもでもすもの
遺跡に着け、と命令され、町を出ました、鞆に遺書と、身代わりのちいさな宝玉を詰め、哨務の門を出て行きました
雑踏を遡るやうに東へ向かい　この不細工な遺跡に着いたのでした

瓦礫の隙間から、蝸蜒の仲間、団子虫の仲間、わんさかと溢れ出でるばかりが騒がしいこの土地
陽は物思いに傾き、粉塵がいつそう古人の葬列の先を遠く感じさせました

腹をすかした飢餓の童に麵麴を配り、舌を潤らした枯渴の童の水筒に濾過した水を汲んでやりました
時は粛々と過ぎ去り　来訪からひと月　はじめに声を聞きました　皆様のやうな声

早朝のころは、冷気ひた走る薄暗い、劣化した公園のすぐそばに居り、呼吸を整えるため覚えた葉煙草を吹かしてゐたのです
人影一つきりない澄み渡つたちいさな世界、あたかも透明な寂寞の蜜で満たされた、開かれた密室、
そんな比喻も覚えたころです、ひとの声、発する言葉、調子、意味、すべて理解できるまでに育つた
助けを求める声にしては明瞭な　遺された民にしては快活な声　悪戯か何か　如何でせうか皆様

視野を文字にして伝わりきれるほどの語彙を持たぬわたしですから、ありのままを書くに留めるのはやめにして、素直に正体を明かしておきます

古人が建てた販売機の声でした、温かい飲料を売る販売機の、宣伝の声でありました
疲労は靈魂となり、身体に保たれたなけなしの体温であり、僅かながらの土気なのです
しかしそれらは東風に吹かれ煙草の火さえ消えました　鼻の奥が痛みました

小さいころは悲しみも何も、一過性のものでまるで過ぎ去る風のやうなものだと
ところが今になつて気がつくのは、そのころの傷がより深く、より永く痛みを伴うということ
公園を離れ、瓦礫の続く、大通りを歩く、ここに存在した遺跡は望郷の都市の名残であり、
戯れに造型技師が設えた特撮のパノラマではない　そのことだけを覚えておけ

混擬土がせり上がった尖塔を見つける、記憶では市営団地の一角であります
地に墮ち破裂した貯水タンクに圧され、潰れた駐輪場、と外壁の残骸

隙間に動く影ありて、むんずと掴み、引つ張りあげれば、鉄骨に八つ裂きにされた孤児の亡骸であり、つい涙が流れました
原型を留めていない彼は他方ではわたしであり
堤防で終末を悟つた
独りの、糞餓鬼に違いないのです

皆々様にとつては

『惘然なる海に没す』

潮流に乗り、何にもなれず
訓辞の波に洗われ、今宵、遠くまで来た

溚に咲いた友人たち 汀に朽ちた友人たち 口唇の麻痺した魚に噛み千切られて
文化に微分して有限会社の浜辺に溶け寄る 砂として 宇宙塵として

驟雨に弄られ、何にもなれず
古書を紐解く暇も呉れず、午睡に喰われる墨の残像

岬に佇み 物思いの汐は風に果てる 泡となりて 枯死した珊瑚礁で戯る遺言
薊を投げ 詠まれる弔いの歌も聴き取れず 海鳴りとなり 漣音となり

樹液を纏い、何にもなれず
空虚な塑像ばかり生み、嗚呼、又この詞かと嘆く声

去っていく舳を見過ごし 船出を許された楫音を耳で追い 羨望を照らす灯台
巷に折れた斜塔など幾つも見てきた 職として 生甲斐として

此処其処の水は冷たい 拙い芯から凍えるようだ

竜宮の遣いに見捨てられれば 板子一枚 地獄の漂浪

緻密を描く極光の妙 収獲された畸形の双魚

重油に見惚れる水月観音 胡乱で貪る魚籃観音……

波濤が穏やかになったかと思えば どうやら千年余の光陰が過ぎ

地軸は勝手知ったるあの角度とは 目を瞠るほどの誤差がある

深みも温き 小童の口中 不味い馬珂貝ばかりが殖えて

久方ぶりに出逢った海は 吾れに冷たく 彼らに甘く……

陸に上がりて、何にもなれず

詩藻の化石を希い、唯、言の葉の叢中に埋もれる

『射手座のマシン』

古代を生きた老科学者が死せる恋人のために回路を創った。

星々の漏沙を吸い、矢を放てるだけの電流を生み出す回路だ。

同窓の好で出資をしていた放送局の取締役は痺れを切らしていた。

挙句、発注していた集積回路が未だに手付かずだと知り、激怒する。

地下牢には老科学者の姪、両手首を繋がれて軟禁されている少女がいる。

少女の名はメーリーン。死せた恋人同様に、偽書による神話の女神の名前。

儂とあの娘の魂を繋げてできたエピトロコイド 弦も径も 手前にや分かるまい
時空を分かつ 通りの矢文に逆さ文字で書く 前世の悲恋

地平線に太陽の笑みが、北上する満月の仏頂面が時を司る。

父に似て、兄や従兄弟に似ていると頬杖をつく幻想をみる姪。

紅茶を煎れたよと牢を訪ねる彼、生憎、砂糖も牛乳も切れていた。

褥のうえに盆は落ち、ひっくり返つて湯気を立たせた茶葉の芳香。

揺らいだ重力は彼の視野から姪を遠ざけ、箆箭の脚だけに注目させる。

メーリーン。姪の名前。ε次元を超えれば、何時ぞやの花屋の娘の名前。

儂とあの娘の魂を繋げてできたハイポトロコイド 弦も径も 己じゃ分かるまい
竜巻を孕んだ 死の楕円形 祈りは暴れる流線型 いずれは黒点

老科学者の胸を貫いたのは純真無垢な少女の眼差し。殺傷に非ず。

そのことをよく知っていたからこそ彼は今際にスイッチを押した。

姪が閉じ込められていた地下牢の二室となりにあるラボラトリー。

未踏の暗闇で人知れず、起動の頃合と指示を待つ射手座のマシン。

回路に電流が走り、記憶が蘇る。息を吹き返し、少女は思い出す。

嘗て存在した二人の時代。若き科学の天才に愛されたわたしの名。

花を愛し、空を愛し、星を読み鳥と歌う神話の女神。メーリーン。
勤める花屋の店先で舌足らずな茶の誘い。銘柄も又、メーリーン。

長閑に花の薫りを嗅いで田舎で暮らす生活よりも、数式と火花と、

鉄の臭いが満ちるラボラトリーでの生活を、選んだ彼、譲らぬ彼。

最後の手紙の便箋に、描いてあつた挿絵は天使。愛と幸福の射手。

地を駆る賢者、人馬と勘違いした彼。どうでもいいわ、そんな事。

わたしと彼の魂を繋げてできたサイクロイド 軌跡も咎もあつたもんじゃなし
相似を宿らせ 放つた鎌で愛する男を射抜いた 顛。側頭葉

クローゼットに猫の亡骸。腸は唇に似て、人形遊びの成れの果て。

酔うほどの薔薇の香と、過日、厭過ぎた花屋の奥によく似た臭い。

少女はわたしの星の姉妹と、賢さに溺れた貴方は思い込んでいた。

運命に紐を通すマシンなんて戯言。幼稚な積み木のモンタージュ。

射手座のマシンを生み出したのは賢く愚かな貴方ではなく、そう、

遠き星から望むより大きな時の意思。貴方こそ、貴兄の星の兄弟。

貴方と貴方の魂を繋げてできたサイクロイド 輪廻も流転も 気付くも愚か
貴方を貫いた光の筋は 遠き雲海から解き放たれたマシンの片腕

知らぬことが愚かでも、今更に、知り遅れたことが愚かでもない。

そんな身なりで知った気だけで、天使に微笑み返したことが愚か。

かくいうわたしも潔白に満ちた病室で、救いを求めて気付いた身。

貴方のことを悪く言えやしないわ。共に天誅を受け、共に転生を。

わたしを殺した占者の予感 彗星の屑 貴方を殺した天使の回路。

薔薇の棘 腐った牛乳 都会の雑音 全て貴方の射手座のマシン。

貴方の亡骸を檢視した男の家に 娘が生まれて わたしは扉の陰からその産声を聞いた

猫の弦で鍛えられた可憐な声

母親が笑顔で名付ける その名前を わたしはしっかりと耳にする

また起動せよ 魂を繋ぐ 射手座のマシン

『遺産I』

小夜よりも深く 胃液よりも甘く 抱く搔く後悔を束ねた鬘

三和土をあがつてくる貧弱な木馬の背に 弔文を震えるコンビニエンスの薄墨で記す
見れぬ間にきみは変わってしまったね、と胎児の写真は日付を指差し 面映く笑って
いまはまだ遠き土地 星座も異なる熱帯夜に 照れつつ撮った幽明のプールサイドよ
一週間が過ぎた きっと一年が過ぎ 過ぎてから気付くのだ 過ぎてしまったことを
教師よりも優しく 恋人より厳しく 叱る泣くあんなにも愛していた面影

蜘蛛の巣の張った天井を何人に見られることも厭わない それが誰かの意中の人でも
帰郷して咳払いをした 胸が痛む言い訳ができた 弱弱しく見せる台本は整っていた
安っぽいアクリル板でしか感じ得ない呼吸 棺に詰まった霊氷が疑問符を浮かべても
変わってしまったのは面影の方 旅行のさなか 貴女はぼくの幻想でのみ生きていた

蜥蜴よりも鈍く 朧月より疾疾と 揺らぐ消える午前二時の連絡船

雨天は去り神の御加護と撫で下ろした肩 はて 悲喜交々の渦中に宿命とデジャヴ
歯車は 賛美歌奏でず蠟燭も燃やせず涙も流せはしないけど 故に親しき人を集めた
花束はどれも似たり寄ったり けれど如何だろう 見渡して飲む貴女の笑顔が見える
嵐には持ち堪えた心の臓 肺の臓 一息ついて訪ね来る日常に瓦解するまるで砂の城
天使より悪戯に 少女より純粹に 思い描いた母子像はどうせ貴女の夢のなか

いまはまだ第一章 時間はまだある 遺書を認める心持では誰の心も揺さぶれぬ
分かっていたよ 詩の才がないことぐらい

けれど才がなくても愛はあったさ たとえば貴女の遺作のように

一夜の終に家族の心に触れられたならそれが幸福

狂う手前で文字を弾き出し 現実には背く生業の屍 病の痛みも薬の苦味も

灼かれてしまった貴女の瞳が見届けてきた世界の彩りも 引き継ぐことはできないけれど

たとえばぼくに貴女がいたように ぼくには言葉があり物語がある

たとえば貴女にぼくがいたように 稚けな我が子がほらこんなにも たくさん

祖母に抱いてもらえなかった我が子を他人は残滓と呼ぶけれど きっと貴女は褒めてくれる
端正な孫だと

我が身の生きた証だと

御越し遊ばせ 残暑干からびた故郷へ
合言葉は 平和 門を開けましょう 必ずや波形の明星に怨みひとつ

炎天下 密室の色彩の罨

灰色の一面に薔薇が咲いて 狩人が摘んでいく 爪を真っ紅にして
万華鏡 繊細な委員長の重圧に似て
休暇明け変化した座席表 声荒げて殴打され 大人がひとり町から消えた

御疲れでしようと女将が 濡れた撫で肩の
押入れのなか覗いてばかりは困ります 肌蹴た臍脂の単 せめてこちらもと
寝て起きた 氷床の祠 溶けてなくなった夢
敷衍の余波 びくついた瘴気 三男像 聳える丘は不毛 稲妻龍の宿

誰もが災いと呼ぶでしょう 暮らしからすれば我が儘と 営みからすれば若気の至りだと
素知らぬ顔をする夏と 八方美人の秋冬と春 とどのつまりは 居場所がないのです
いいえいいえ 抗いなのです

岸辺で舞う人あれば 櫓のそばで乱れる人あり

絵心がないので再現はできませんが 盲でもないので確りと憶えております
妹の証言 光る蟲を見つけたと十も歳下の舌禍 お陰で失いかけた平均台

上履き隠され 机のなか 代わりに潜むのはダルメシアンの糞
無作為に鼻腔から脳を吸う悪霊 洩の樹液 舐めにくる甲虫
脳みそめいた麦藁帽子に刺した風車 我々は 更に我々はと唱う

誰もが災いと呼ぶでしょう 知り尽くしているから赤裸々と 縁も気炎もなく墜落す炎喰い鳥 きゑきゑ 何故鳴き止まらずに
素知らぬ顔をする夏と 天衣無縫の四季に倣う 羽根筆られてもなお何故に泣き出さずに阿呆阿呆
誰もが災いと呼ぶでしょう 暮らしからすれば我が儘と 営みからすれば若気の至りだと いいえいいえ 抗いなのです
素知らぬ顔をする夏と 八方美人の秋冬と春 とどのつまりは 居場所がないのです

御召し遊ばせ 絵日記忘れた墓標で

合言葉は 平和 天を割りましょう 星霜を費やした宴が盛り上がる時間帯
されど とどのつまりは 居場所がないのです

暴れて小細工 蹴散らして楽土に旗を揺らす 不動の皇 両刀の皇
かき集めた水を飲み干し 塩辛さを確かめては 汗をかき 土曜の午後

管を巻いた天使は五隊列 蠟燭の大砲 取り囲んだ一群

映し出されて瞳目 朗読していた童話の結末を永劫の元に回顧する

侍女を呼びつけ記した裁決 壁画の兵士を招集して解き放て

事が済んだら夕餉を準備 什器は消毒 銃器と重機 刃向かうならば総て解雇

分厚い火星鉄の門扉 四元素にも当て嵌まらぬ力と尊嚴の媚薬

揉め出す小隊長と軍曹 飛んだ痴話喧嘩と四畳半の紛争 彼奴らは斬首

発作見せ転がりまわる警官 嘔吐物蔓延る景観 將軍の名はフォッサマグナ

鎮静剤と見せかけたラード注入して 組み替える彗星の徒 月桂冠のギガース

虚心飾って繁栄に着手 夕べ観た夢に浮浪の皇 狂想の皇

天竺螺旋の二重構造 秘匿のパズル網羅して鼻ほじる 素の暴動

教師が一人 介助が二人 料理人五人 踊り子十人

就任間もなく逃げ出す意気地なしは悪鬼が喉貫く 夜伽を蹂躪

蛍雪星雲の刺青を彫った 解剖実験の準主役にはボーンラスとして

絶え間なく惑星ダウンガの混濁音楽 鼓膜を破る息吹と断末魔を聴かず

気化する亡霊種族のフェルマータ 嫁いだ従姉妹の切なる依頼で

緑を切り売り キルトの端っこ御裾分け 剥き出しになった大陸猿の臀部

視野のきわでは満月が小首を傾げているから 眉間に打ち込んでやった鉛のダンテ

判別できそうにない血漿と結晶細胞 軌道を反れた機動型タキオン 酸欠の一端

反省なく 幻夢感覚でパラシュート撃つ 無情の皇 楼上の皇

棚引く煙で気流描き パレットで溶くと嵐の自画像 初冬の業

章魚の足持つ修行僧は片目を瞑って 焦燥感に耐えかね出国手続き

宇宙塵の寄せ集まった思想の反時代性 玉座の前と格納庫の奥の監視体制

取り上げた星間旅券はシュレツダーにかけて 最果ての東国へ投獄

家族親戚纏めて シェルターに押し込めて 流罪と火炙りのダブルミーニング

被る電波 エックスの名の元に 無重力で連鎖式のオーラルセックス

読み聞かせ終えた幼児からレイプ グレイブスニル戦艦内部の総合藝術

バルカン名物 日焼け達磨のメイプルシロップがけを堪能するブラックホール征服

干渉に負けた男女のアブダクションされた終には 半鐘鳴らして降らす流星雨

戦術なくし思想もなくして 奪った銀河 不老の皇 兆候の皇

循環機関洩らした吐息 数光年先届く勝鬨 鬱蒼の法

語り継がれている皇の末期といえば 後の怒りを買い腰に杭を打たれ

骨を絶たれたという不可思議 衆生の皇 明星の皇 刹那のなかの大往生

『滑車の満月』

ゆめゆめに刃を研ぎ 森と砂塵を切りつけていく機械工学を識りながら
視えない手が夜空を翳し 手首に彫り刻まれた不定義の刺青を読むと
漏沙など不要だと 時空は版画の屑のようだ と 燕尾服の蝙蝠が宙を転がる

(鼻を殺めたのは 毒菓 結核 蝙蝠の親父 ……)

ニヒルな程度に息を吸う 反射した水面を黄泉と呼んだのは浅薄ながら
紐解いた手帳に書きつけた鼻の怨 喀血の溶けた再生紙の詩を読むと
詐術の裏に 魔術師の影 弓形に映える黄泉の横顔が地を舐め 宙を転がる

(鼻を殺めたのは 芝居 虚栄 蝙蝠の親父 ……)

時を発ち のめり込む夜へ 土を純金に見せかけたのは天の御徴るし
帯と杭とで打ちつけられた 弧に這わされた自縄自縛

地上を覗き込む水蛇の頤を捕らえて 地に引けど
横目で黄泉が眺めるばかりで 円盤は動じぬ 火時計は揺れ

地平線を劈く鉄砲 雄鶏の死を告げる ついでに奇術師の罫を解くつもり
射手は軽快な足取りで輪舞の手本 ビリディアン of 衣服は鱗皮に似て
囚われた幼馴染の少女の瞳を 滅びず濁った七色の硝子球を 宙に放った

(墮落した天才に 花も 土産も 御伽噺も勿体無くて)

蠍に牽かれ丘を往く舟 蜃気楼の帳を旗めかせ 裏の世界を暴いたつもり
舵手は哀しみ漬け 太古の海の藻屑 錨を弄する船長の心臓を読むと
地鳴りが生じ罅割れる星座のフレスコ画 幾千の艶なる破片 宙に放った

(墮落した天才に 靴も 剃刀も 十字架さえも勿体無くて)

幻を断ち 瓦解する夜へ 水を砂に見せかけたのは極光線の御験るし
カーヴをなぞり止まらない退行 環に秘めた自縄自縛

垂れ下ったロープが括り付けられている怠惰の冠
黄泉が総てを匿う御陰で 世界は又とない空想の劇画に酔う

(波に浚われて行方知らずだった 蝙蝠の化石)

(金塊五つで 贖おう)

(少女が夢みた自由の象徴 著名な恋人との記憶)

(金塊三つで 贖おう)

最果てに着き 銜する夜へ 世界を地獄に見せかけたのは異界の御標
灯はコンベアを流れ出た星 窓は月 互いを自縄自縛
男の手と女の眼差しに守られてのみ進み往く車輪
水鏡の中に棲む邪まな黄泉を掻き消し 廻り始める永久機関

(望遠鏡を持ち込んだ砂の宮殿の一室 誰しも期待していた終の世界史)

(黄泉が涙を呑んだ御陰で 少女が雑誌を読み終えた拍子に)

(いまは夢となり 過去は砂となる)

(自らの鼓動を早める漏沙 頭を抱え気狂わす技術者)

(暗澹とした帳が開け 裏の 更に 裏の世界から姿を現す)

(理論の発案者 機関の設計者 滑車の管理者 流砂の傍観者 ……)

(博識ゆえに生け贄となった ……)

(時空を分かっ眼 夜啼く鼻 ……)

『羽撃の姫君』

途轍もなかなしみが衣服を破り
生まれいでたわたくしは
四畳半に住まいし子子 指揮棒振り
操る貴女は瑠璃葵の空を夢見て 家を出た黒揚羽（揚力の姉御）

観念だけの扉を叩いて 外に出た三日三晩
送迎は決まって会釈するだけの弥次郎兵衛
当日限定 小指の先までの指定券と乗車券
か細くなつていく故郷の夜景 ふつと郷愁

途轍もなかなしみが頭巾を拭い
曝け出されたわたくしは
土管から顔出す溝鼠 諸手振り
追い越す貴女は瑠璃葵の海を夢見て 襖を開けた鴉揚羽（揚力の妃殿下）

一筋の光 一錠の水 一叢の虹 一括りの風
浮上する刹那に貴女が視た 水晶の地図は
幾千の男を灼き 幾億もの男を寔れさせる
幾青蓮華の女の胸に棘のついた花よ 咲く

途方もないかなしみが鎧を剥いで
送り出されたわたくしは
喧騒を愛す小判戴 戸を叩き
嚇す貴女は瑠璃葵の島を夢見て 人を愛した鳥翅蝶（揚力の女神）

黒ずんだ空 墜落し蛇行する幽霊の名を知っている
旧世界の貴女 朱色の皇女（ネル） グレート・モルモン 中華の孔雀
すなわち 海燕の尾 あるいは着飾った墮天使の亞種（羽撃の姫君）

『妖魔のデッサン』

片輪は翠 片輪は白
わたくしたちには似合わぬ広さの
林を憎む
糜爛の屋敷という林を

(幼稚な

幼稚な

幼稚な 振動)

重ね着は蒸し暑く 薄着は寒々しい
越冬よ 許してたもう 越冬と 名を変えたおぼとおじ
わらわらとともに生まれた兄妹なのに
わたくしたちには与えられぬ紋章が
この家にはある この時代にはある

藪肉桂の宮殿に降り立つ力天使の帆
塔守よ 怠ることなかれ 兵長よ 彼奴の皮は剥いて弔旗に
頑丈に設えられた楠木の幹による砦に
都市から来る狙撃手が毒矢を
濡れた鍬が 天蓋を裂いて鍬が

青い三角定規 黒鉛の鶏冠の群
わたくしたちには似合わぬ呼び名を
腐葉土に乗せ
湯気となつて消える共時の虞

(数奇な

数奇な

数奇な 傷痕)

◦瑠一族の末裔は淡い色調に透き通つた
両性具有の生殖器を持つ 双子を生んだ 双子を生んだ
水面に触れ 雲に触れ 僅か一抹の
鱗粉も溶けぬ前に絆の融合
俺は わたくしは お前は貴女

比翼は淡色 肥沃は男色

わたくしたちには似合わぬ弱さの
霧雨に敗け
吸われた空を汚泥から水鏡

(巧緻な

巧緻な

巧緻な 弾指)

運命の刻は力天使の再訪
誤りを創つた指先が 宙を嗅いで 夜露を読んで
永久に離れまいと誓つた兄妹なのに
乾かぬ翅翼は脆く発破し
広間は嘆声 墓には喝采 大いに響き

左方はアイテム 右方はテーマ
世継を亡くした枢機卿と連む魔導の
翁が掖庭で舞う
欠いた月にはすべて答なし

(典雅な

典雅な

典雅な 飛翔)

数世紀が経ち 公営住宅の敷地内で
崩れた砂山の奥底から 埋もれた骨塚が現れる
蠟と化した青筋の 透き通つた翠の鎧
石と化した帝揚羽の黄色い斑 いまだ曲率は零

ランドセルを背負つた幼い二人が木の枝で

「夢かな」「そうじゃないかな」と突つつきながら頬を染める

離れ離れになつた今の二人が 女の方が

「可愛らしい絵」と嘗ての二人のポートレイトを眺め 漸く曲
率は円かを成す

……その、半弦は翠 半弦は白

(妖魔の

妖魔の

妖魔の 描画)

『ファンタズマの三姉妹』

騒動にゆれる科学館とそれに備え付けの植物園
色香を纏った思春期の臭角がこぞって食紅をむさぼる百貨店となり
出遅れた擬の生徒が 圧倒的 強情な巨人に呑み込まれる
鳥の翅がなかったからだ と級友は申う

一雫が街を浚うほどの巨人の涙と 鼻をつく香辛料の類
解れた闇の糸に包まれ身を捨る木乃伊は波濤から逃れようと
決して 呑み込まれまいと 死に物狂いのアルゴリズムが
都市の中央に熱帯雨林を生み出している

靈魂再来 Reincarnation 来るべき世紀末のギヤラリー
咎なくて死すなんて戯言 開眼済みの 風車のシナジー tinkling bells

裂傷に燻される工場の跡地 揺り籠はさんざん溶岩で爛れ
棲むか棲めぬかと瀬戸際で焚きつけられた奇々怪々をこじらせて来々
孵化せぬ卵の葬列を縫うように いかづちを描く 後の浮世大陸
研究熱心な特使の姿は いつか出逢った紅の紋

或る快晴の日の午後 似姿の夢の名を持つ誘引で
劇画調無意識の暴露 植物の灰 催眠素 複眼では見たことのない塩基の骨格
警戒と擬態と媒介を使いこなし 太陽から遠のく美麗種よ
一世界の変貌は 見届ける価値があるか

靈魂再来 Reincarnation 殺ぐへき空虚感のエナジー
天つ吹く風とは誰のこと 花壇を舞う 宝珠のレガシー tinkling bells

生ける知恵を授かった青麝香 極楽浄土の色彩を受継ぎ
野蠻種である巨人を破り 毒素の姦計を競う紅の紋を辱めた戦争前夜
すでに焰と化した捕食者の魂は渾然一体となり 罌を怨む夜
かしく山林 溪谷は歓ぶ 高原は序曲を口ずさむ

靈魂再来 Reincarnation 跋扈す救世主のジェラシー
光あれ 落伍者たちの墓場に祭れ陽炎 正邪のリテラシー tinkling bells

樹冠を貫く夏の薰陶 いまはもうない
紡錘形の極光 いまはもうない
雛菊の幽霊 いまはもうない
ランドセル幻想 いまはもうない
饅えた歴史書 いまはもうない
交雑した密林の蜜 いまはもうない
枯山水を象る樹脂 いまはもうない
孤児が生む乱気流 いまはもうない

飛ばないかもう
あの家の 子は
仕組まれた エキス 一匙の暗黒は 華族のジレンマ
この道を 滅ぼさずに
夢幻の道を 断ち切った真似

嘘は真実 滅多に出逢わぬ地下水路 流出した汐
娘らが舐めた 前世紀の媚薬は 麗わしの PHANTASMA
死せることも出来ずに美の抜け殻となりて 浮浪す
生命を得た 最高水準 乙女の標本 下界鳳蝶曼陀羅
いづれ来る世紀 宇宙を孕む魂魄のフィロソフィー tinkling bells
tinkling bells ……うまはみいかな

『笑傲劇』

適当に作った世界だから適当に滅べばいいと亡者の寝言を聞いた。

朝――。

薄荷の列なる小径を上り往く驢馬と御者、老害の風に布を旗めかせる。驢馬は暴れない。黒く巨きな犬が門前で口を開けていても、頭を垂れたまま進み続ける。外反母趾の蹄を引き摺り、重荷をよいせと担ぎ直す。口笛に魔が差す。

幻惑な花の香りだけが飄々としている砂地の公園で子どもたちは待つ。

驢馬は笑わない。家畜にも解る道化の可笑しみに満ちていても、そそくさと陰に引込む。地に振動。砂埃舞う。粉塵が血迷った猩々蠅となり宙返り、これも白内障の見せる幻か。

昼――。

昨夜の深酒のせいで午前から逆上せた郵便配達夫が道端で胡坐をかく。傍らには毀れた自転車。借り物である。借り物であり、安月給を続ける為の担保である。煙草を持つほど豊かではなく、そこいらの草を千切り銜えて誤魔化す。

水妖が浸透しているかのような空に、模倣の地図を描いた白絹の鱗雲。

どうしたものかと巡らす内に、脳裏で描いたとおりの山脈の向こうから、鋼色の蝶の群れ。空に波動。雲が遁走。気化した汗さえ痺れるほどの亀裂の気配。宿酔のせいに違いない。

夜――。

蒸着したのは名も知れぬ金、装飾鏤めた加工布で裸体を秘して踊る女。

模造宝石には男衆の精子を封じ込め、与える餌は楽屋裏、もしくは賭場での紙幣の紙屑。肌臑、腰を捻り、裾を引き上げ、冒険者を誘う罌の宝殿を演じる、女。

頭わになった肩甲骨の下、翻った蝶の入墨に触れた男はどうに海の底。

悲しみは口紅を重ね塗りして悦びに換え、抱き寄せた熊の縫い包みには、懐かしい匂い。目蓋を開けば電飾の覗き合う舞台上、肩が羽ばたいた瞬間に、ネオンが騒ぐ、街に機動音。

墓石のパズルを解き、続く荒野を渡り、さらに荒涼とした跡地を訪れた詩人。

黒々と焦燥の徒が転がる街角で、野良犬の骨が風に攫われる瞬間を見る。

言付けを信じて削いだ鼻だが、視野を侵し、腐臭が鼻腔を突き破る。

市街地は静電気を帯びたか、口許を覆う手首が醜く異常な震え。

詩人の脳が恐怖を帯びる、胸糞悪い僅かに笑いに似た恐怖。

広場の壁には行儀の悪い抽象画。黒鉛に見紛う絵の具は錆の浮いた血痕である。

麻葉を嗜む花卉のような、魔術に屈した雄牛のような。

歪んだ輪郭に妖魔の佛を見、置物となり息を呑む、朴詩人。

妄想は落書きにことばを覚え、居もしない画家の声、耳を啄む。

悪魔来りて悪魔来りて、安直な、馴染みある地獄の声援に胸を病む。

解いたかと思つたパズルはなんてこともない未完成のパズル。寄り道をした。

驢馬は兵士となり、金貨を愛でて成金と化した。数世代の間には苦難があった。配達夫は釣鐘草となり、狭められた区画の端で石と雑草に埋もれて咲いている。女は噛み砕かれて城壁の頂上で揺らめく軍旗となり、銃砲の謡曲を聴いている。

身支度を整える詩人の背中を睡るのは、戦火が画才を創つた、抽象画家の幽霊。

詩人の眼には勇壮さが宿っていない。ぶくぶくと肥えた鉄の塊が降つた刹那の街道を灼きつくした紅蓮と相似、藝術の火。行くがいいさ、灰色の懷囊の中へ。

幽霊の消失も知らず、詩人は幾つもの街を通り過ぎる。西へ、西へと突き進む。荒廃したどの街にも探しているものは見当たらず、ただ悲壮が付き纏うばかり。浮遊する魂が詩人に古い詩を唱えさせる。――途轍もない悲しみが衣服を破り。

詩人は知らなかった。

花時計の迷路を抜け出せずにいた孤独の蝶を一度、掌で捕らえたのは彼である。詩作も恋も、恐怖も知らぬあどけない少年の頃の彼こそ、蝶の救い主であった。故に海岸に出た蝶が帝国へ辿り着き、指揮官の夢枕に妙薬を振り撒いたことも。指揮の元、詩人と二、三も違わぬ軍曹が、操縦士に離陸の合図を示したことも。操縦士の指先ひとつで蓋が開閉し、愈々、市街地上空で投下が為されたことも。弾頭は宙で翅を広げ優雅に空を舞ったこと、地上の民の頬が緩んでいたことも、

知らない詩人は野宿をしながら、幼いときに読み聴かせられた詩を朗読する。反芻する。

堪能する。

妄想が濃紫の翅を広げ、詩人の脳裏を旋回したとき、世界は寒気に嘔吐した。詩に恋をし、ことばに恋をし、蝶に恋した詩人は、その恋を三人の娘に描き、愛撫する。

性交する。

鱗粉に鼻の粘膜を刺激され、ひとつ嚏をする、詩人という名の、ただのひと。

鉄が降る、

夢をみる。

亡者の寝言は卜書の類……と囁語を唱う詩人の頬は、稚く緩む。蝶のように。

『巡る・柱・断罪・変身物語』

われは客間を往く金剛石の戦車なり。

門扉を ZIGZAG に斬り、階を平打ちにして釵を製作する能動技師なり。

足首の鎖は寢室へと繋がり、阿修羅美人の手許からは離れられない。

われは鼓舞する幻燈時代の力士なり。

屹立する鮫肌の土俵上で、好敵手を気儘に蹴散らすことを生業とす。

鉄板の皺なら遍く押し延べられたが、女将を尻で敷いたことはない。

われは沙漠を流離う乞食の詩人なり。

毒を食らわば、詩語を吐き出し、蜜を吸わば、砂造の薔薇を咲かす。

棄れた心に居残りたるは、故郷の（嫁）。他人に娶られた御転婆娘。

あんなに家に懐いていた娘たち三人を順に見送り、

置き去りにされた髪飾りは何時の贈り品だったのか、

朝から記憶を辿っているのだが、一向に思い出せない。

七五三、とおの誕生日、進学祝いかその他の記念日にか。

それはそうと、何番目の娘の持ち物かさえも判らずにいる。

八つ時に温い紅茶を頂き、妻とつかの間の静寂を共有する。

何がつかの間、これからは当たり前になると妻が云う。

長いこと自分のために化粧をすることもなくなった妻。

娘たちを手離し、心中には何が残っているのだろう。

釵でも買ってきてやろうと思いつき、紅茶を呑む。

白砂に囲まれた海原にひとつの柱が建ち、大気中から水分を得る鰓呼吸の若布の群れが葬列を成していた。亡びた珊瑚を弔う詩が雲を吸い寄せ、柔らかい棺を形作る。収納されていく海の想い出は古。猿は居ず、猛禽も居ず、家畜も居ない大陸には竜と蟲と昔鼠と織微の浮遊者、鰐魚ばかりが居り、非時の酵素を蓄えた末裔たちがいま、風化した珊瑚を空に放とうとしている。人間たちは水風船を透鏡代わりにして古代の旅を愉しむ。案内役が右手を翳した空の青は見憶えのある青だねと家族連れが戯け、項垂れる竜の種族を呼びわり合って独自の世界で歓ぶ、物静かな男女。南に旋回する飛空艇は轟火山を瞰し始め、灰が森を融かしていく様、焰が岩盤を削っていく様、煤烟が雲を暗黒に染めていく様を眺める場面に入る。海棲葬送曲のこと、参列した古生代の主のことなど思い出しもせずに人々は森から波濤の様に羽ばたき出てくる尻挙げ蟲の群れに嬌声を聞かせ、終の宴と云わんばかりに手を叩く、踊りを舞う、笛を聴かず、溜息を洩らす。誰そ彼時にやって来た紙芝居の小父さんが撥を鳴らして了と云う。巻いて閉められていく絵物語は途端に、海も火も飛空艇の械もない空き地の光景に掻き消され、体育坐りをする児童に飴玉を授けると、決まってこう云う。「此れにてキミの細胞が、隠してきた歴史、終わり、ね」

酔いどれの宵に、見入る女はまぼろし。

色香も、美貌も、絵空事。

水にどつぷりと頭を浸けてきなさい。

夢は醒め、冷めざめとして皮膚の色味も増すだろう。

こちらの蜜がより甘いと気付くだろう。

だからなお更、少年風情には勿体ない。

逢坂の上で待つ、案山子／早乙女／恋女房・死臭を嗅ぎつけてきた鬼子母神の目頭・背景には太った落陽・塵芥収集の車輛よ、来い。遠く色褪せた河川敷の途中まで・点点と足跡つける魔女の血／曇／流星泪・清浄のうち細切れになる蜃気楼・霞は滴り、水溜りになり、蒸発して地を這う芋虫になり、蛹化／木乃伊／包装された冥府を発ち、破壊された妖精の丘へ。

五十を数える贗作の絵／似姿／虜の肖像・常若の国よりみすばらしい墓穴を選んだ先人を嘲笑うかの如く・PHANTASMAと称された精神展開薬／虞美人草の根を剥いで湯に晒し播り潰し繭のなかの混沌を絡めた／媚薬に、惑わされた手品師の如く・魔法で構築した茨の門／樹液の塔／密かなる四阿に祀られた、勢いばかりの猛き姫君／絶世の美女子／迷妄の巫女。

われは天漢を流るる宇宙の氣息なり。

舟を漕ぎ、翡翠の眠りを拒みながら、水底の石を積上げる僧侶なり。

貌も、業も、神経も失くした妻への細やかなる聖柩を築く作業なり。

……て。

……ふ。

買った方がいいが、渡し方に苦心した挙句、妻の寢室に赴く。

わかりやすいところに隠そう、すぐに取り出せるように。

ひらめいたのは鏡台上の小函。覗くと叱られた、あの。

螺鈿が煌く装飾に気圧されつつ、蓋を開ける。ふと、

ここからは鏡越しでしか見えぬ背後、寢室の扉が。

引き攀った顔に浮かぶのは驚き以外の何でもない、

卑屈な、貧相な、被虐な、作り笑いに遜色ないまま、

坩堝に嵌っていく、ずぶずぶと耳介の奥に響く。恰も、

手前の美麗な翅が黄土の褐色に変じていく様子、A a a、

腐心し覗き込むと、メルシナ型時空に埋もれた少女居眠る。

て……

ふ……。

「極彩色の貝殻を受けたが当然波の音を聴くこともなく、模糊の視点で鑑みる。(加爾叟謨)の味を嗜む余裕もないらしい。ましてや立ち上る匂いも温度も、つまりは形相も感じ得ることなく、砂塵のなかにばら撒く愚者も居るものである。脳裏に幾ら星屑や乖離の恋人同士を描いていようが、不可思議な網膜に映る悲喜交々は神の夜語りに昇華され、夢を費やすに徹す。

貝殻の臭気が(本来、主である二枚貝の霊体でもあるが)生命の実体であり、情動の陽炎である。カリギュラの力漲る禁忌を破った行いのみでなく、無駄な浪費も罪であろう。厭離の暇はなく、脳回路が焼きつくまで、神経が固く結びつき蝶を模すまで、

空虚のエナジー……孤児のエネルゲイアに取殺されるべきだ。

て……。

ふ……。

どうしたのと真顔で訊ねられ、思わず紅茶を洩らす。布巾で拭いながら、先刻は午睡の幻影だと気がつく。電飾に恋する蛾／少年と同化した蝶……それも幻影。娘が喜ばないからと云い、妻も喜ばんと何故決める。総ては時が来てから、事の一切に帰着するのだろう。

変なひとと笑う妻から庭に視線を移し、緑を眺める。手品師のような大きな蝶がゆっくりと密林を抜ける。我が家の小庭はいつからか蝶道になっていたらしい。後に続く、第二／第三の蝶／ひらひらと舞う聖少女。

て……。

ふ……。

上品に、優雅に翅を羽ばたかせる大きな蝶は、長女。ひとつの花の周りばかり踊る中くらいの蝶は、次女。休みなく花から花へと飛び回る魅惑的な蝶は、末女。それでは君はいったいどの蝶なのか、と虚無に問う。血に囁く、五十の姫／寶石函の少女／虫愛づる姫君。

「わたしが本当の……」

酔いどれの宵に、見入る女は魂。

色香も、美貌も、幽かな行灯。

水にどつぷりと頭を浸けてきなさい。

夢は醒め、冷めざめとして皮膚の刺激も増すだろう。

こちらの蜜がより苦いと気付くだろう。

だからなお更、詩人風情には勿体ない。

『甞る道化は老萬人』

俄然生氣のみが先走りする兔が夢野を駆け巡るとき
呱呱の声を上げた赤ん坊
天蓋には中流家庭の幻影
火の輪をくぐる父の幻影

蒙昧たる視野の切れ端に追憶と郷愁の層が宿るとき
両親を呼ぶ発声の着想と
今は知り得る団長の思い
臉で鞭振る支配人の無恥

観覧席から見覚えのある顔見覚えのない顔覗くとき
到底辿り着けない天幕で
呼吸を合わせ踊る奇怪人
優等なり双子の鞦韆乗り

頭蓋骨に Initial No.

額の V は血管なり 欠陥なり

失くした H は家臣なり 過信なり

枯死した Sephiroth この思想は絶やすことのないように

脱兎が騏驎になるときに 駿馬が飛蜥蜴になるときに
文字を識り 恋慕を知り
学びを誇り 手練れた業
愛きを誇り 萎びた童話

指関節に Initial No.

眉間の 8 は魔月なり 禍津なり

臍の 13 は佳日なり 果実なり

枯死した Sephiroth この詩想は逸ることのないように

時に四半世紀が参るとき 末期の眠りに待するとき
猛獣遣いの消えた舞台で
鳴り響く万雷の拍手喝采
身振手振りの宮廷道化師

吾肉体に Initial No.

顔の R は弛緩なり 子癇なり

名付けた B は奇縁なり 気炎なり

膝行る道化は老萬人 この死相は慣れることのないように

閉幕の前に書き写した日記帳 たしか捌いた切符の数は萬を超え
嘲笑の的の愚者 涙と星の化粧が似合う出来損ないの Pierrot
笑っていたのは数多の Clown 同工異曲の準主役もしくは観衆の老
団員でもなく道化でもなく 観客でもないのに笑われている
己が誰か 解らない

天幕の外で 微笑む Harlequin

貴女の為に彫った墓碑銘 溝に沸く蛆という名のことばの道化
白面に群がり戯曲の準備 夢中の霧晴れて ようやく零になる道化

私たちの皮膚は微視なるうちに、精密な箱を宿しているという。箱自体を取り出すことはできないが、蓋を開くことは可能のようで、なかでは青く透き通ったびいどろの球体が、独り中空に浮いているのだ。

火花を吸い、冥府の砂と灰燼を濾過し、大気を久遠の結晶に封じるかの如き、あたかも海原に撃ちおとされた銀河の宝珠であり、天道を転がされ神の玩具だとか、そうかほんとうにそうだろうか、真空の蒼玉は、連想された物語の賜物なのか

神話・伝承・童話・奇談・小説によって創出されたまぼろしのだろうか
気紛れに取得した休暇（週のなか日の水曜）の午下がりに、気紛れに
そんなことを思い創めたら無尽蔵に溢る今生への猜疑心、虚栄心

判じてはいるのだが悪癖は治らず、時半が経った今も居眠りの隙

非空気の充ちた球体に身を閉じ込めて何物からも拒絶された世界
あたかも滅んでいった子宮の奥底で、天上天下の夢をみていたい

そんなことを思うようになってしまつて、収まらず、留まらない

エーテルと呼ぶにも神の気はどうに寂びれ、羊水と呼ぶには

大切な母体の、その、面影なく、困っているのは擬態の門

声や容貌なら甦る時代です。そこに居るようなものだと
遂に死は空虚を充たされ、鄭重に仕舞われた箱のなか

常時透き通った硝子となり、受け継がれていくのだから
そんなことを思うようになってしまった民を殺す

時代を殺す世代を殺す世界を微視界を殺して

私たちも死のうか、巨視へと至るより前に

敢えて巨視界を受容し、遙かなる宇宙で

暗黒に溶けた壺酒に酔い、眺むならば

善母の指紋は渦を巻く星雲となつて

蒼いびいどろは気流を纏う親しき惑星

そうかほんとうにそうだろうか、浮遊水

自転する鉱石の果実、水族の棲む大伽藍

街路樹の海、火葬場の夜景、多肢の摩天楼

大地に記された阿弥陀をなぞるよりも早く

私たちの腕や顔や、頭蓋のなかの皮膚

肉という肉に仕舞われたあの精密な箱

そのなかに仕舞われた各人のびいどろ

ひと——と呼ばれる歴史書を紐解けば

この地の、つまり、知と値と血と痴で

築かれた文明と、民の子宮に刻まれた

呪詛の意味を直ちに理解できるはずだ

知は治を生み、値は質に挿げかわり、

血は乳となつて流れ、痴は恥としても

地には池ができ、びいどろは沈みゆく

水底に達した余波が新たに渦を生み、

凝固した砂塵や泥濘に潜む非ずの金

石化し、火を呑み、純水を吐き、今

蒼く透徹な宝玉となり時の軸を跨ぐ

遠くまで、迂回してさらに遠くまで

だろうか、ほんとうにそうだろうか……

そうして誰かの皮膚に仕舞われ、発掘を待ち

箱と呼ぶには豪著な枢を模し、精巧な錠前で以て

久遠に現れる微視の眼を持つ私たちの誰かを待ち構う

視界の靄を結露させ、溜め込んでおく場所として後に継ぐ

遠きより眺め、近きにて凝らし、細部に触れ、象形の翳影に恋せよ

抛つては失くし、捜しては見付け、態度を改め、憧憬の念に拿捕される

材料を拵え、角度を測り、そこに鍛錬を識るも遍く晶系の徒に囚われる始末

滑らかに美しく妙味と巧みな高貴さと深遠と自由と不可能を、僅かな小径に込め

どこかの美麗たる子宮に、唯一無二のびいどろを埋め、その創生の法を承継していく

宿命は命を宿し、運命は命を運び、ほか諸々を書付け、虹彩と網膜を封じ込めたびいどろ

私たちのびいどろ、巡礼してさらに私だけのびいどろ、私のびいどろ、いつかは皆のびいどろ

眼を瞞るだけでなく耳を傾ければ、呼吸、声、嘆きの溜息、エーテルと熱量そのオーラ、オーロラ

油膜のなかの虹彩に昼と夜が集えば、悲喜交々渦を巻き、未来を見据える透明度に宇宙が産声を上げる

北斗

無常の水

漱がれて育ち

漸く整う意識の隙

黄金の卵、火山色の脳

涙が成す刹那の間

時は凝固する

星の誕生

南無

東亜

西刹

そうか……真実にそうだろうか。